

学位請求論文要旨(課程博士)
青年の自己確立
—日本のアイデンティティの理論的構築—

柴田 康順

人間学研究科福祉・臨床心理学専攻臨床心理学コース博士後期課程

第一章 これまでのアイデンティティ研究

アイデンティティ研究は日本において数多く行われてきたが、研究者ごとに様々な定義がなされていたり、アイデンティティの状態を類型化するアイデンティティ・ステータス・モデルによる検討が中心に行われてきたことで、青年それぞれの個別性を背景としたアイデンティティ形成について考察するというアイデンティティ研究における本質的な要素が見落とされてしまっているという問題があった。近年、特に日本の杉村(1998)らによって、自己と他者の関係のあり方がアイデンティティであり、それによってアイデンティティの形成は進んでゆくのではないかという指摘がなされるようになった。

それらの背景を踏まえ、本研究は青年のアイデンティティ形成に i) 母親、ii) 父親、iii) きょうだい、iv) 同性の友人、v) 異性の友人・恋人との関係がどのように関連しているのかという点について、質問紙法(『現在の自己投入』『過去の危機』『将来の自己投入』の3つの下位尺度の得点によりアイデンティティ・ステータスを評価する同一性地位判別尺度(加藤, 1983))、半構造化による面接法、投映法(TAT、SCTなど)を用い、量的及び質的な調査を行い、アイデンティティ形成のプロセスと様相を踏まえた理論モデルを生成することを目的として行われた。

第二章 調査方法

調査対象者は縁故法によって調査協力の依頼を行い、承諾が得られた20代の青年10名であった。調査は4回にわたって行われ、期間は2010年10月から2012年3月までのおよそ2年半を要した。調査内容はまず質問紙により調査対象者のアイデンティティ・ステータスを評定し、上記の5領域の小規模集団との関係性について半構造化面接により調査対象者のこれまでの対人関係について回想的にふり返り、投映法を実施するというものであった。

第三章 母子関係・父子関係とアイデンティティ—第1回調査—

母子関係、父子関係が青年のアイデンティティに対して与える影響についての調査を行った。質問紙によるアイデンティティ・ステータス分類の結果、AF中間地位2名、DM中間地位7名、拡散地位1名となった。

面接調査の結果から、母親からの影響は日常的な感覚の面で大きく、心理的距離は大学

生以降も近いままであり、今後の母親からの精神的自立は状況に依存することが見出された。また、母親は家族の潤滑油のように家族成員間を結ぶ役割を果たしていた。一方で父親は節目における影響力が強く、社会的な存在として認識されており、もともとの心理的距離が遠いため、父親からの精神的な自立は母親と比べて達成されやすいと考えられた。父親は規範的な存在でもあり、青年の行動規範の枠を規定することに影響を与えている一方で、この枠が明確でない場合には父親のイメージを取り入れることを困難となっていた。また、日常場面で接触する機会の多い母親は対話を通して価値観を無意識的に取り入れる作業が行われるのに対して、父親とは日常場面での接触が少ないため、母親や他のきょうだいとの関係を通して間接的に父親の価値観に触れることになり、父親の価値観がどのように形成されているのかが理解できないまま取り入れられることになることが推測された。

両親の関係は対人関係の基礎となり、父親的、母親的なコミュニケーションを身につける場となると思われた。また、両親の関係は家庭への帰属意識と関連しており、家庭を自分の居場所と感じられるようになるためには両親の関係が良好であることが必要であると考えられる。両親の役割は必ずしも父親が父親的役割、母親が母親的役割を担う必要はないが、母親が優柔不断で決定力がないと感じながら父親を役割モデルとすることができないとき、アイデンティティの確立は妨げられ、母親に決定力があると感じているほどアイデンティティの状態は高いと考えられた。さらに後者のうちでも父親に決定力があると感じていることがアイデンティティ達成へと近づく要件である可能性が示唆された。

TATでは、アイデンティティ・ステータスごとに表出される母親イメージや父親イメージに特徴的な差異は認められず、TAT物語に投影された自己や対象との距離の取り方に特徴的な差異が見られた。AF中間地位は対人的な葛藤場面で一通りではない対処方法を試しているが、DM中間地位は物語に対する自己投影が強いあまり、現実場面での対象者と同様に一定の価値観に基づいた行動を繰り返すといった融通の利かなさとなって表れていた。このことからアイデンティティの確立は自己投影がなされている人物などに様々な役割実験をさせられることと関連があると推測された。

母子関係、父子関係は子どもに大きな影響を与えるが、それは母親や父親の特徴を取り入れることが無意識的に行われるために生じると思われた。それは母親、父親との直接的な交渉によってのみ行われるのではなく、家族成員それぞれが持つ母親、父親のイメージを総合して間接的に形成される部分も大きい。また、両親がそれぞれの親とどのような関係を持っているか、両親がこれまでどのような人生を歩んできたかといった両親のアイデンティティを自身のアイデンティティの拠り所と感じられることも青年のアイデンティティ形成においては不可欠であると考えられた。

第四章 きょうだい関係とアイデンティティ―第2回調査―

きょうだい関係が青年のアイデンティティに対して与える影響についての調査を行った。質問紙の結果、AF中間地位が4名、DM中間地位が6名となった。

面接調査ではきょうだい関係における両親の存在は無視できないものであるとした上で、年少のきょうだいは年長のきょうだいの影響を無意識的に受けており、自分ときょうだい

を同一化するために模倣が行われていた。そしてある時自分の中のきょうだいの影響について意識するようになると、それを排除するために現実にきょうだいと衝突して、その過程で自分独自のものを探していくことが見出された。また、年長のきょうだいは両親を内在化して年少のきょうだいにかかわる一方で、両親からすれば対等のきょうだいという関係という中で葛藤しつつ、きょうだいの存在から家族の中での自分を規定していた。

FIT では自分以外に自分と最も近いと感じる家族のシールとの関係について考察し、アイデンティティが確立されていない場合には最も近い家族を心配する姿勢が見られ、家族の中に依存したい気持ちと自立したい気持ちが葛藤しているようであった。一方、アイデンティティが確立されているほど家族全体を対象化して捉えており、自身の同一化の過程について認識していることが推測された。

きょうだい関係自体が対象者のアイデンティティに影響を与えていることは推測されつつも、きょうだい個人との関係以上に、両親との関係をベースにした上にきょうだいとの関係が成立していることが非常に大きな意味を持っている可能性が示唆された。調査対象者は両親のかかわりや態度、姿勢を見ながら他のきょうだいとの間で自分が担うべき役割を試行錯誤しつつ、家族の中での自分の位置を確立させていた。家族の中での自分の役割や立場に対して疑問を感じながら、家族以外との人間関係も含めて自分の担うべき役割を模索したりすることできょうだい関係は対等のものに近づいていく。きょうだいとの関係を対等だと思うためにはきょうだいに対して持つ劣等感や引け目などの負の感情を処理する必要がある、アイデンティティの確立と関連しているのはこのような感情を処理した上で自分をきょうだいの中、ひいては家族の中に適切に位置づけられることである可能性が見出された。

第五章 同性の友人関係とアイデンティティ—第3回調査—

同性の友人関係が青年のアイデンティティに与える影響についての調査を行った。質問紙の結果、達成地位が1名、AF 中間地位が2名、DM 中間地位が4名、拡散地位が3名となった。

面接調査ではいずれのアイデンティティ・ステータスにおいても①友人関係を持つことは安心感をもたらすものであること、②自分と友人は異なる考えをしていると理解していること、③関係の修復は積極的に行われるものではないこと、の3点が共通していた。いずれもアイデンティティが確立されるほど友人との関係性を重視して、友人関係の維持と拡張を行い、それによって自身の価値観を広げようとする傾向があり、反対にアイデンティティの確立の程度が低いほど、友人関係に不安を感じ、友人からの影響を受けないように受け身的にかかわる傾向があった。

SCT ではアイデンティティの状態は関係性と時間性と関連しており、関係性の長期化と深化に伴って時間的展望は変化し、まったく想像できない状態から相対的に肯定的なものになっていくという可能性が示唆された。

同性の友人関係は自分が学校などの社会で生活する上で必要な環境としての要素と、

様々な価値観に触れる機会としての対人関係としての要素を併せ持つことが見出された。同性の友人関係の中での重要な体験は自分の思う自分と他者から見た自分が異なることに直面することであり、この両者をすり合わせる作業に成功していることが後のアイデンティティ確立に大きな影響を与える可能性がある。この作業に失敗すると対人関係において常に不安が付きまとうため、他者と親密な関係性を築くことが困難になり、結果的に自分のことも他者のことも理解できなくなることに繋がる。特にアイデンティティ拡散の状態にある人の場合、他者とかかわること自体がストレスとなるため、他者との親密な関係性について思い巡らせることもできず、環境としての関係性以上の親密な関係性を回避するようになることが推測された。

第六章 異性の友人・恋愛関係とアイデンティティ—第4回調査—

異性の友人関係や恋愛関係が青年のアイデンティティに与える影響についての調査を行った。質問紙の結果 DM 中間地位に 7 名が分類され、達成地位、AF 中間地位、モラトリアム地位に各 1 名ずつ分類された。

面接調査の結果、異性の友人という意識が強まるのは小学校高学年頃から大学入学頃までであり、男性と女性では異性に対する意識が変化する様相が異なり、同性集団の形成と関連が深かった。二次性徴に前後して女性において同性による同質集団の形成が進み、男性からは女性の身体的な変化は理解されつつ、内面的な部分が不透明になった結果、女性に対する分らなさが増大し、それまでと同じかかわり方ができなくなる一方で、女性は男性に対する意識はそれほど変化していないが、男性とは話が合わない感覚を覚え、結果的に男女ともに同性集団の凝集性が高まっていくと考えられた。男性は、女性が同性集団を形成することによって女性のことを集団として理解するようになりつつも、少しずつ同性の友人と同じように個人として関係を持つようになっていた。また、異性関係において衝突は受身的に回避されつつ関係の維持への努力が積極的に行われることはなく、相手側の状況の変化によってかかわり方が変わると捉えられていたことが特徴的であった。恋愛関係は家族との関係における安心感とも異なり、自分を開示することに対して抑制をほとんど必要としない関係であった。そのため、恋人から見た自分というものは自分が対人関係の中で意識して演じているものではない自分の姿である可能性があった。恋愛関係を回避する人は自分固有の領域に踏み込まれることによって自分の存在が脅かされる不安を感じ、関係性そのものを解消することで精神的な安定を得ようとしていることが示唆された。

異性の友人関係および恋愛関係とアイデンティティの間には明確な関連が見られず、異性の友人関係に関しては相手に同一化したり、相手の特徴を取り入れたりする過程は生じにくく、対人関係一般の文脈で捉えられているように思われた。恋愛関係は親密な関係を希求している場合と親密な関係を回避している場合で異なるが、親密な関係を希求しつつ、それが職業決定との間で両立できないものと捉えていた対象者が達成地位に分類されているなど、調査対象者の半分が恋愛関係と結婚とが具体的に関連づけて考えられるような年齢であることを考慮すると不整合な結果となった。このことから、青年期における個としてのアイデンティティ達成が『職業決定』であり、関係性から見たアイデンティティ

達成が『結婚』であると考えた場合、両者は単に連続した発達段階の発達課題として理解されるべきものではなく、異なる次元で発達するものである可能性が示唆された。

第七章 縦断研究から推測される青年のアイデンティティ

4回の調査結果を縦断的に分析し、個別のデータとしてまとめたところ以下のことが示唆された。他者との関係性において最も親密な関係は親密な両親の関係が与える居場所感を基盤として、両親にとっての子どもとして自分の役割を明確に意識しつつ、両親との心理的距離を適切に保つことが前提となる。両親はそれぞれが価値観や行動様式などの形成に影響するが、両親のうちどちらかに対して同一視する程度が強い場合には、もう一方の親との心理的距離が離れ、その親から受けている影響について自覚できなくなった結果、両親との関係において自分を適切に定位することが困難になる可能性がある。

両親と自分の関係が明確に取り入れられることで、きょうだいとの関係について様々に葛藤しつつも、次第に家族の中できょうだい順位に沿って適切に自己定位をすることが可能となる。両親の関係において自分を適切に定位することができない時には、きょうだいと両親の関係に対して嫉妬や羨望といった感情を持ち、きょうだいに対して劣等感や過剰な競争意識などの意識を持つことになる。きょうだいとの関係はきょうだい順位に規定されつつお互いに尊重する関係となることが期待されるが、きょうだい関係における葛藤を解消できていない場合、明確な上下関係やきょうだい順位の逆転が起り、きょうだいとの間で親密な関係を築くことが困難となる。

同性の友人関係は他者との対人的距離を学ぶ場となり、その距離によって①自分が攻撃されない環境として自分が関与する環境に存在する友人、②ある程度の相互交流が行われ安心できる環境としての友人、③相互交流が盛んに行われる信頼できる存在としての友人、という3領域に分けられると思われる。特に③の信頼できる友人を持つことは家族関係との関連が深く、親密な友人関係を築くためには関係性の基盤となる居場所感を確信していることが必要となる。家族関係の中で両親からの影響についての自覚が不十分であったり、きょうだい関係における葛藤を解消していなかったりすると、信頼できる関係を確信することは困難となる。

異性の友人関係は同性の友人とは相互交流の在り方が異なるものであり、対人的距離は同性と比べると遠いものである。異性の友人関係においては対人的距離を明確に意識していることが重要となり、このことが異性愛的な感情を自覚するための前提となる。恋愛関係は他のどのような関係とも異なり、相互交流が盛んであり、相手に対する同一化の程度も高くなるような人間関係である。信頼できる友人との違いは家族関係のような居場所感を持てるような個別的な関係である点であり、家族と異なる点は恋愛関係では自分の価値観や行動様式の見直しが積極的に行われることが多い点である。恋愛関係に対して不確実感を持っている場合には自分の価値観や行動様式の見直しはあまり生じず、異性と恋愛関係となること自体を回避する姿勢に繋がる場合がある。

以上の結果を踏まえて関係性と時間性の連関を基にした理論モデルを構築した。関係性領域は親密性の程度によって【攻撃されることのない環境】、【安心できる対人的環境】、【信頼できる対人関係】、【関係性の核となる居場所感】に分類される。【攻撃されることのない

【安心できる対人的環境】は自分が関与することのできる環境を構成するすべての事物との関係性であり、【信頼できる対人的環境】はその中でも相互交流が行われる対人関係である。【信頼できる対人関係】は相互交流が盛んに行われる関係であり、関係維持の努力によって関係が永続的なものとなる期待が持てる関係であるため、非常に限定的な人間関係として【安心できる対人的環境】と区別される。【関係性の核となる居場所感】は家族関係のように関係維持の努力を行わなくとも関係が永続的なものとなる期待が持てる関係であるため、関係性の中で最も中心的な要素であり、【信頼できる対人関係】とも明確に区別されるものである。

【関係性の核となる居場所感】が十分に形成されていれば永続的な関係に対する期待を持つことができるため、対人関係を希求する動因となり得る。【信頼できる対人関係】を他の対人関係と明確に異なるものとして自覚していれば、それを取り巻く【安心できる対人的環境】は幅広いものとなる可能性があり、自身が関与する環境のうちに示す割合も大きくなる。このような関係性の状態にいることを自覚している状態が<現在>の自分であり、<過去>を参照したり<将来>を予期したりして<現在>の自分の在り方を修正しながら外力によって不安定になった<現在>の自分を関係性の中に再定位するプロセスがアイデンティティ形成のプロセスであり、<現在>の自分の関係性の在り方がアイデンティティの様相であると考えられる。この作業の中で参照される<過去>や<将来>の自己の在り方は一次元的な時間軸上に存在するわけではなく、異なる領域の自己が参照されるため、ある領域での自己定位の状態が総体としてのアイデンティティに波及すると推測された。

第八章 総合考察

これまでのアイデンティティ研究で求められてきた量的研究と質的研究の折衷を試みたことで青年の生き生きとした姿を描き出すことができ、特にこれまで研究の蓄積が少なかった父子関係やきょうだい関係、異性の友人関係といった領域について有益な知見が得られた。また、「個」と「関係性」というアイデンティティを異なる 2 軸で考えるのではなく、互いに関連し合いながら発達するという視点を持つ必要があり、特に「関係性」から見たアイデンティティは単に他者との対人関係という 1 次元的なものではなく、現在の関係性の中での安定した自己定位が何らかの要因の影響で動揺したときにでも、さまざまな領域における過去から将来の自分を参照・予期することで再び適切な自己定位を行うことができるという時間性を帯びているものであることを視覚的に示したことに本論文の意義があると思われる。対人的なつながりを重んじる日本における青年が自己を確立していく際に、関係性と時間性が連関しながら変化し続けるという部分に日本的アイデンティティの特徴が表れているといえる。

ただし、本研究によって日本的アイデンティティの理論モデルを十分に示したとは言えず、縦断研究の間に生じたライフイベントや社会変動などによる個別的な変化を経時的に追っていくことが今後必要な研究課題として挙げられる。